

熊本藩の医学教育と物産学

松崎 範子

熊本大学医学部同窓会熊杏会

熊本藩では藩主細川重賢(在位:1747-1785)の時代に藩政改革(宝暦改革)が推進され、その最中、宝暦6年(1756)に医学校(再春館)と薬園が開設された。再春館は公立医学校の始まりとされている。

ところで医学校と薬園は同じ年の開設ではあるが、7月に藩医福岡元斎が朝鮮人参植方及び製法一切を命ぜられたことに始まる。元斎が翌8月に薬園の開設に着手すると、藩は9月から12月にかけて薬園請込役の藩医3名を任命し、10月には薬園管理に藤井四郎兵衛(源兵衛)を置いた。12月に医学校が開設されると薬園は再春館附属となる。いっぽう医学校は9月に医業吟味役3名を任命し、12月に村井見朴を教授に登用して開講された。

ここで着目したいことは、わずか半年の間に医学校と薬園が開設されたのであるが、藩の対応として福岡元斎に朝鮮人参植方並びに製法一切を命じて、医学校より薬園の開設を先にしていることである。幕府徳川吉宗は享保改革において薬種政策に取り組み、朝鮮人参の国産化をはかった。熊本藩では藩政改革のなかで朝鮮人参植方及び製法一切を命じられた福岡元斎が田村藍水の門人となって、人参の国産化に取り組んだ。田村藍水は宝暦7年以降、弟子の平賀源内らとともに江戸で開いた薬品会を、物産学へと発展させた本草学者である。同13年には幕府医官に登用された。

再春館初代教授村井見朴の長子は椿寿といった。村井琴山のことである。宝暦13年に京都の吉益東洞に入門すると、翌年5月1日に熊本へ戻るまでの滞京中、2月に「熊府薬物会目録」という一冊をまとめている。これは椿寿が主宰する善音堂において、毎年6月に薬物会を開催するための規約であり出品目録である。熊本で薬物会の準備をしたのは藤井・荒牧の二氏であった。藤井とは薬園を管理し、後に再春館で本草学を講じることになる藤井源兵衛であり、荒牧とは椿寿の門人荒牧玄齡である。薬物会への出品物として椿寿は30品を準備し、藩内からは家老米田氏を始め14名(うち医師が9名)が72品を、長崎からも3名(11品)があったが、関西地域からの出品者が非常に多い。大坂地区が11名(49品)、南都が8名(26品)、和歌山が4名(9品)、赤穂が1名(10品)である。全体では42人による207品が記されている。

これらの出品者には、宝暦10年に本草家・医師である戸田旭山が大坂加治屋町浄安寺で開いた薬物会の記録『文会録』にある人々(15名)や、同12年に平賀源内らが江戸で開催した東都薬品会で全国出品物の取次所となった者たち(5名)が含まれる。本草学者として著名な木村吉右衛門(兼葭堂)の名前もみられる。大坂の戸田旭山は15品を予定しただけでなく、社約には出品物については旭山先生の評をうけるとの一条がある。

このように椿寿が企画した善音堂薬物会は、当時江戸と大坂地区で盛んに行われていた薬品会(物産会)を熊本で開催するという壮大な計画であった。これは椿寿が吉益東洞に入門するために上京したことによる新展開であり、椿寿にとって大きな成果であった。

かつて『肥後医育史』を編纂した山崎正董は、医学校と薬園は医学教育において輔車の関係にあり、薬園の隆盛が医学の興隆をもたらしたと両者の関係を説明した。医学校・薬園の設立の背景として藩政改革期という時代背景を考合すべきで、熊本藩の積極的な医学教育への取り組みは、産物の国産化と表裏一体の関係にあった。藩が宝暦6年に医学校と薬園を同時に設立した目的には、医師の養成とともに、産物政策に寄与できる本草学者の育成という積極的なねらいがあったのである。これが藩の政策を担うべく設立された、藩立の医学校の使命でもあった。